
らぶっと

ポイント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らぶっと

【Nコード】

N7096H

【作者名】

ポイント

【あらすじ】

彼女いない暦15年！そんな俺でも彼女ができる！？期待を胸に抱きながら颯太が入学した高校にはたくさんの美少女と、ほんの少しの秘密が……！???ドタバタありえないラブコメのはず！！

ストーリー：1（前書き）

初めまして ポイントです！

これが初の投稿になりますので何卒何卒あつたたく読んでやってください。

またご意見いただければ幸いです

ではまた後ほど（笑）

ストーリー：1

春。長い階段。桜並木

四月某日 時刻は九時すぎくらい

この季節、この時期となれば、どの学校もたくさんの真新しい制服の新生たちが新生活に胸をときめかせて入学してくる。

それはこの高校も同じで今日は、その入学式で校門前では式に参加する学生と保護者で溢れかえっていた。

ただ残念なことに今日に限って天気は大荒れで、せつかくの見事な桜も傘と雨が邪魔して見る事ができない。見えるのは激しい雨に撃たれて無残に散っていく薄紅色だけ。

入学式に雨なんてそうそうあるものじゃない。

そして、もうひとつ。そうそうお目にかかれないモノが人ごみの中であつたことを、この時は誰も知らなかったのだった。

校長の話だの新生の挨拶だのを聞いて、つまらない入学式が終わり、教室に入って今度は担任の挨拶、いろいろなプリント配布とお決まりの流れで時間が経っていく。

そして――

「じゃあ時間も余ったみたいだから自己紹介でもしてもらおうか。名前と出身校、あとは好きなものとかだな」

当然の流れで自己紹介タイムが始まった。

みんな「恥ずかしい」だの「何言おう?」だのの空気が漂う中、出席番号の早い奴から自己紹介。

出席番号順とは番号が後ろの奴らはラッキーなのだが番号が早い奴…例えば男子の一番の奴なんかは本当に困ってしまうわけで…

「あ、安岐 颯太あき そつたです…」と、西中から来ました…で、えと、好きなものは野球…ス。よろしくお願いします」

みたいになってしまう。

この少年——安岐颯太は「あ行」の苗字のため運悪くテストを始め、大体のものを一番にさせられることが多いのだ。

まあ、今回はそのおかげで

「猪野 誠いの まことです。榊中からきまつした。好きなものは女の子全般です」

と、ふざけた自己紹介を初っ端からかます誠と、つるむことができたのだった。

世によばれる「高校デビュー」に憧れていた颯太としては非常によい出だしなのだ。

何を隠そう（隠す必要もあるのだろうか?）安岐颯太という人間、生まれて十五年「彼女いない暦十五年（泣）」の強者なのだ！

そしてそんな彼も「高校では彼女できるぜえ!」（兄談）を信じ、今朝も少し早起きしてボサボサ寝癖をツンツンモテヘアー（某男性雑誌より）にしてきたのだ！

今日の俺は一味違うぜ

さらに彼の懸命な姿を神が見ていたのか、女子に声かけなれてるっぽいダチもゲット！

そして極めつけに…

「なあ安岐、うちのクラスって当たりだよな?」

当たりです！大当たり特賞ものですます！

女子は輝くような美少女がたっくさん

その中でもずば抜けて美少女なのが…

「保志^{ほし} 楓^{かえで}です。羽根丘中学校から来ました。好きなもの…という趣味は料理とテニスです。よろしく願います」

とても丁寧に自己紹介をした彼女——楓である。

顔は小さく全体的に整い、黒目がちの大きな瞳に桜の花びらのような唇。

肌は一度も日に当たったことがないように白く透き通り、抱きしめたら折れてしまいそうだが、程よく健康的な体をしていて、華奢な肩には腰くらいまで伸びる藍を帯びた黒髪をしていた。それで趣味が料理とテニスとくればポイントが高い。

というより

「俺……モロタイプだ……」

こうして颯太のハートに深くふっかく矢は刺さった。

「うおーい？安岐ちゃん？」

耳元から気持ち悪く誠の吐息がかかってくるのに気づいたのは、ホームルームが終わった後だった。

「安岐！お前ずっと保志見つめたまま固まってたぜ？しかも保志も気づいてて気味悪がってたぞ？あは！」

ああ、そうか。俺は見とれてて、保志に気味悪がられて…！？？

「短い春だったな、安岐」

お母さん…颯太の今日始まったばかりの春が早くも終わる予感バリバリです。

てか終わりました……

まだ生きて、家で風呂場のカビと熾烈を極めた闘争を繰り広げている母に届きはしやしない心のテレパシーを送りつつ、今日できた友に肩を叩かれる颯太なのだった。

外の雨はさらに激しさを増し、また一片悲しく桜が散るのですた。

ストーリー：2（前書き）

こんにちは！ポイントです！

またまたやってきました！お粗末ラブコメ第2弾！！

P S 前回感想くださった方々ありがとうございます！！

ストーリー：2

「にしてもさ、羽根丘中って聞いたことないよな？」

あの衝撃事件から早一週間が経ったある日の帰り道。

男二人で気持ち悪く歩いていて颯太は不意に感じた。

「あゝ…そいや聞いたことないな。どこなんだろう？」

「お前が知らないのを俺が知るかよ…保志以外にその中学出身のやついないから、どうにもなあ。俺ら聞こうにも聞けないしな」

あの日から颯太は楓に避けられているのだ。

というよりも睨まれている。

最初の笑顔はどこへやら…

それに見かねた誠が一度近づこうとしたのだが、

彼いわく

「…あの、ごめんなさい」

と話す間もなく避けられたそうだ。

理由は多分、颯太といつもつるんでいて、彼女の「ヤバイ人リスト」にでも勝手に登録されてしまったのだろう。

そして、やはり容姿端麗で性格もいい人の近くには、たくさんのファンが付き物のようで休み時間になるたびに彼女の周りには男女関係なしの人だかりが、できており、彼女が颯太たちを避けているのを知っている彼らは暗黙の了解のように避けているのだった。

もはや恋だの言ってられない。

「はあゝあ」

かつこ悪くため息だつて出ちゃうさ。

「ま、女は保志ちゃんだけじゃないって…そんな気落とすなよ。じゃな」

とか言いつつ、誠の背中はどこことなく元気がなかった。

きつと女子相手には百戦錬磨（顔も悪くないし、背だつてある）のプライドが、楓も見向きもしない態度で見事に碎け飛んでしまったのだろう。

おいたわしや、おいたわしや。

心の中で友に同情をしつつ自分も帰路についた、その時

「安岐くんっ！」

「ぬおわ！」

突如、後ろから名前を呼ばれ、肩を叩かれ、マヌケにも驚いてしまった。

「あは！驚いてる驚いてる♪」

ヒラヒラと手を振り、少女は楽しげに笑つてみせた。

「安岐くんも、こつち方面なんだねえ」。私もこつちなんだあ」

格好は颯太と同じ学校の制服で顔は…どこかで見たような？でも

「コイツ誰だっけ？」

「！？」

「みたいなの？」

コイツ、人の考え、読みやがった！

しかも可愛らしく小首まで傾げてやがる！

ちよつとだけドキッ！

読みが当たつたとわかつたのか、イタズラっぽく笑つてみせ、
「超能力ツス♪…なあんちゃって。冗談だよ。顔に書いてあるよん？」

…そんなに俺は顔に出るんだろうか？

ちよつと悲しくなつた。

「でもひどいなあ。ちゃんと自己紹介してたのにい」
今度はむくれてみせる。

表情がコロコロ変わる子だな。

少女は、颯太の少し前で足を止め、くるりとスカートを翻して、回れ右をして振り向いた。

「では改めて自己紹介！私の名前は白崎凌央（しらいき りょうお）！西中央出身で好きなものはアンチヨビといもけんぴ！夜露死苦」

一気にそれだけハキハキと言い、挨拶（特に夜露死苦らへん）に合わないスカートの裾を、ちゃんと持ち上げ、足をバレリーナみたいに組んで、お辞儀をした。

「よ、よろしく…」

控えめに返事をする颯太の両手を無理やり握り締め

「よろすいく！よろすいく！」

肩の関節から抜けそうな勢いでブンブン振り回す。

…人間、踏ん張れる足があつて良かった良かった。

が、しかし

…——ゴキ！

大変いい音をたてて、関節は外れたのだった。

「んもう、安岐くん。これくらいで関節外してちゃダメだぞ！修行がなつとらん！」

痛みに悶える颯太を見て、半笑いで肩に手を添え、

ーコキッ

治してみせた。

自分で他人の関節外しとして、さらに自分で治してみせた。
てか、女の子に関節外される俺って…

関節ついでに男のプライドも密かに壊された颯太に

「あゝ…まあ、そんなに落ち込まずにさ。私、みんなの中では力あるほうみたいだから、たまたまだよ。だから元気出してさ」

それくらいで戻るほど安くはできてないのだ…くすん。

「ありゃ？マジへこみですか…じゃあ仕方ない！」

グイッ

「お、おい！また関節が…」

「大丈夫、大丈夫！今度はちゃんと調節してるから。それより速く速く」

確かにさっきのバカ力ではない力で引っ張られている。

二人の帰り道。

この先は確か…

「ふう〜着いた着いた」

到着したのはコンビニで、ここは颯太もよく行く場所だった。

店内に入ると、やる気のない店員の挨拶と最近よく聞くJ・P O P。

凌央はすぐさま菓子コーナーへ走っていく。

待っている間、雑誌でも読んでいようと足を向けると

「安岐くん！こっちこっち！」

そんなに広くもない店内で大声で呼ばれ、周りの客の冷たい視線を浴びつつ、渋々でも大また凌央のほうへ行く。

「そ、そんなに大声出さなくても聞こえてるよ。何？」

さすがにここまでくると颯太でも頭にくる。

「あれ？不機嫌？」

そりや不機嫌にもなるさ。てか空気読め！

「んゝ、まあ、いいや。あのさ何買おうか迷ってたんだ。何かおススメある？」

颯太的にはどうでもいい。てか早く帰らせる！

だから

「じゃあ、これでいいんじゃない？」

というわけで押し付けたのはメジャーな赤い袋パッケージのお菓子（うす塩味）。

ジャガイモが国産とかなんとか…

「じゃ、俺帰るから！」

踵を返し、店内から出ようとする颯太に

「ちょ、ちよつと待ってよう！」

凌央の声が後から追いかけたが遅かった。

外に出ると西の空が少し赤くなって夕方を知らせている。

学校が終わって、すぐに帰路に着いたはずなのに、こんなにも時間経っていたらしい。

「さて、アイツが来るまでに帰…」

「安岐くん！」

大急ぎで出てきたのか息を切らせながら凌央が追いついてきた。いい加減、我慢できん。

「ゝあのな！」

「はい！これ！」

キレイようと勢いよく振り返った鼻先に突きつけられたのは、さっきのお菓子。

「あのね安岐くん、さっきはゴメンね。安岐くんと話せてあんまりにも嬉しかったもんだからつい舞い上がったちゃって…だから、これ…」

なるほど。それで突如コンビニか…

さつきまでの気持ちが一気にクールダウン。

「その…俺もさつきは悪かったな。…怒ったりして」

申し訳なさそうにうつむいていた顔をパーと輝かせて

「ううん！全然気にしてないよ！良かったあ」

などと言っもんだから颯太も許すしかないってもんだ。

結局その日、家に帰りついたのは夕飯前。それまでずっと近くの公園で話していた。

帰り際に、ケイタイの番号とメルアドを交換して、この日はずっとメールをしていた。

『じゃあ明日また学校で』

可愛らしくデコられたメールでこの日は眠りについた。

また明日になれば白崎に会える。

そんな当たり前のことが無償に嬉しくて颯太は明日を楽しみにしながら眠りについたのだった。

ストーリー：3（前書き）

みなさん、こんにちは！ポイントです！

さてこの話から少しずつコメディィーから変わっていきます。そして颯太の周りも少しずつ変わっていきます！

この差を楽しんでいたただければ作者として感無量です（笑）
引き続きコメも募集中です

それではまたのちほど

ストーリー：3

「へえー！安岐ちゃん、やるう」

次の日登校中たまたま出くわした誠に昨日の話をしたら、そんな感想が返ってきた。

「白崎凌央ちゃんかあ、どこのクラスだろ？名前知ってたんなら同じ一年かな？」

「うん。多分同じクラスの子だよ。昨日の夜思い出したんだ。顔見たことあるもん」

「え？俺、うちのクラスの女子全員チェックいれたけど、そんな子いなかったぞ？」

「見落としたんじゃない？」

疑問はたくさん出てくるが、今日会えばきつとわかるさ。そう考えながら学校へと急ぐのだった。

だが彼を待っていたのは衝撃の事実だけだった。

「ま、まさか…」

そのまさかなのだ。

昨日あれだけ仲良くなった白崎凌央は同じクラスでない。誰に聞いても

「知らない」

あれだけ喋り、笑いあっていた凌央は同じ学年でもない。てか、同じ学校でもなかった。

「ん…白崎凌央って子、載ってないなあ」

職員室、担任にせがんで見せてもらった学生名簿にさえ書いてないのだから確実だ。

ケイタイにかけてもかからず、メールと飛ばしても宛先不明扱い。

つまり

白崎 凌央は

いなかった

と、いうことなのだ。

「どうなってんだよ」

本当にどうなってしまったんだ？

まるで自分以外の全てが『白崎凌央』という人物を、初めからい
なかったかのようにしている。

颯太はそんな異様な感覚にとらわれるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7096h/>

らぶっと

2010年10月10日05時32分発行